

そう言ってあなたはボクを抱きしめてくれました。



そしてボクはあなたの家族になりました。



「ごめんよ。
たすけてあげられなくて…
ごめんよ。」

ボクはあなたのことが大好きだから…あなたもきっとボクのこと大好きだよね？
だから少しくらい寂しくても平気です。

ボクたちは立っていることができなくて次々にたおれていきました。だんだん薄れていく意識の中でおじさんの声がきこえました。

この本は、こういう悲しいことがこの国でたくさん起こっているということを、みなさんに知っていてほしいという思いと、こういう悲しいことがなくなります様にという願いを込めて作りました。たくさんの人たちに読んでほしいと思っています。読み終わったら、"読んでほしいな"と思う誰かに届けてもらえたなら嬉しいです。

このおはなしが本になりました。本屋さんや図書館で、ぜひ探してみてください。

HPから、動画でもご覧いただけます。
<http://aruinu.link/>

お願い

販売目的での転載や印刷はお控えください。また、寄付を募る目的でご利用の方はご連絡ください。

ある犬のおはなし

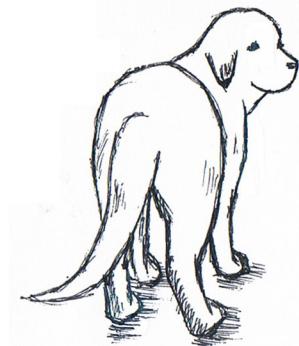
検索

※このおはなしの著作権は作者のkaiseiにあります。

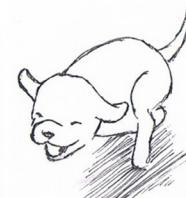
ある犬のおはなし

～殺処分ゼロを願って～

作・絵 kaisei



お散歩も、かけっこも、ボール遊びも、あなたの時間はとっても楽しくて。



そしてボクは歩いていました。
あなたと一緒に歩いた道。
あなたが教えてくれたたんぽぽの道。
この先を曲がれば、またあなたに会える。
きっとあなたもボクに会えるのを待っているはず。
そう思うとなんだか嬉しくなつて、ボクは走り出しました。

